

# イラーチャンドラ・ジョーシーの作品

——『季節の巡り』と『詩人の恋人』を中心に——

田 中 敏 雄

現代ヒンディー文学で、心理小説、心理分析の手法による小説では第一人者と評価されているイラーチャンドラ・ジョーシー (Ilācandra Jośī, 1902-) <sup>1)</sup> の小説『季節の巡り』<sup>2)</sup> と『詩人の恋人』<sup>3)</sup> を中心に紹介することとしたい。

ジョーシーの自伝や伝記はない。同時代の詩人に寄せた文<sup>4)</sup>、インタビューおよびアンケートへの回答<sup>5)</sup>、子息による父を語る<sup>6)</sup>、によって生涯を辿るほかない。

ジョーシーは、クマーユーン (Kumāyūn) の古都アルモラー (Almorā) で、サンワット 1960 年マールガシールシャ月白半月第 13 日、つまり、西暦 1902 年 12 月 13 日に生れている。父は、林野局高官の私設秘書であり、著名な音楽家でもあった。母は、ギターを日課として読む敬虔な人であった。イラーチャンドラは幼少の頃より詩作を始め、ヒンディー文学、サンスクリット文学、特に、ラーマヤナ、マハーバーラタ、カーリダーサの作品に熱中し、英訳で世界文学の名著を読破する早熟な少年であった。8 歳年長の兄、後にブラークリット語の研究で著名なヘームチャンドラ (Hemcandra Jośī, 1894-1967) より、フランス語、ドイツ語を学び、ベンガル語・英語辞典を頼りにベンガル語を独学し、ベンガル文学の作品を読みだすほどであった。

当時のアルモラーについて、中学高校の上級生であり、後に代表的詩人となったパント (Sumitrānandan Pant, 1900-73) の回想<sup>7)</sup> によると、アールヤ・サマージの布教師スワミー・サッチィヤデーオ (Svāmī Satyadev) が訪れ、知識人、青少年に深い感銘を与えたこと、特に、愛国心と共通ヒンディー語に対する愛情を植えつけたこと、この結果、古今東西の良書を収集した図書館 (Śuddh Sahitya Samiti) が設立され、人々は競って読書に励んだ、とのことである。少年達は校内同人誌『月』(Sudhakar) を企画し、イラーチャンドラ・ジョーシーは編集長に選ばれる。

読書と習作に熱中し、大学入学検定試験を受けずに、家出して、アルモラー

を離れる。第一次世界大戦後のカルカッタを中心に、30年代の後半にかけて長い放浪時代が始まる。無用者、余計者、ルンペン・プロレタリアートの生活をしてきたようである。心配する先輩パントに対し、〈……私は文学者ではないし、文学者になろうだなんていささかの野望もありません。私はルンペン生活をしながら満足しているのです……〉<sup>8)</sup>、と語り、〈……当時、文学に対して私はアレルギー症状になっていた……〉<sup>9)</sup>、と回顧している。

インド各地を放浪しているが、拠点ともいうべき都市があったようで、カルカッタとアラハーバードがそれである。また、拠所ともいうべき場は、兄ヘームチャンドラと共に、あるいは単独で編集に関わった新聞、雑誌<sup>10)</sup>である。50年代後半に全インド放送にも関わったが、いずれも長期にわたることはなく、給与生活の束縛を拒んでいるかのようである。

読書と思索、それに加えて放浪生活の所産である作品は、小説、短編小説、評論批評、翻訳、詩に大別される。小説だけに限ると、12編、ここで紹介する『季節の巡り』と『詩人の恋人』を除く10編<sup>11)</sup>で扱われているテーマは、中間階級の都市生活者の否定されるべきエゴである。精神分析学のケース・ヒストリーを記録、分析する方法に見づき、多くのヒンディー語作家が用いる、半自伝的、私小説的方法をかたくなに拒む態度をとった。このため、〈フロイトの著作に挙げられているケースヒストリーの分析を思わせ〉<sup>12)</sup>、フロイト、ユング、アドラーの影響を受け、心理分析による小説を確立した<sup>13)</sup>、とヒンディー文学史では評価されるようになったのである。この評価はさておき、『季節の巡り』と『詩人の恋人』で、ジョーシーはなにを意図していたかを見ることにしたい。

『季節の巡り』の構想は、1956年、全インド放送インドール中央放送局に赴任し、中央インド滞在中に接したマールヴァ地方の自然と人々に触発され、カーリダーサを想うことで成立した<sup>14)</sup>、と自ら語っている。執筆の直接の契機となったのは、66年9月から11月にかけて、北、中央インドの各州に広がり、その規模と破壊力で体制を揺るがすかのように見えた学生運動であった、と想像される。70年にかけて、世界的な規模で学園を捲き込んだ集団狂気と破壊を、イラーチャンドラ・ジョーシーは、否定されるべきエゴの帰結として捉えているのである。病めるエゴを癒し、人間性を回復し、人類社会を滅亡から救うものはなにか。69年4月から7月にかけて山地にこもり、〈自分でも奇妙に思える決意をドンキホーテのように文章に移すことに専念した〉<sup>15)</sup>、のである。

決意のほどは、序文に代えて、スートラを挙げていることから想像される。〈……狂人たちの世界でただたんに生きている非力感……偏狭で陰険かつ無分別な、それ自体ひどく錯乱している今日の政治、これこそがペストのように、放射能の死の灰のように、国家、宗派、集団、組織、家において、集団的に、または、個々の意識下に入り込んで、生の根元を燃やし、溶解させ、根絶しようと狂奔している……いわゆる至福千年期は訪れるだろうか、誰も答えられない……ペストの根絶は、大自然の中で、内的世界の深みの中でこそ可能……〉<sup>16)</sup> この基調が、この作品で繰り返えられるのである。

小説の舞台はアルモーラーの郊外、クマーユーンの自然である。タトサム系語彙を豊富に鏤めた文章で自然が描写される。時期は68年4月中旬から7月中頃にかけての約3ヶ月である。季節の節目である祭礼を楽しみ、あとは黙々と働く村人たちの日常の営みを語りながら、これと平行して、古風なホテルに都市生活者の男女を登場させる。

まず、ミランクマル・チャトパーダーエ。人々から、兄さんを意味する愛称ダーダーで呼ばれている。父の代からこの町に住み、高校を終えた。父の死後、経済的困窮、家庭内の不幸に耐えながら、苦学して英文学の教授となった。〈……ある日、不可視の東北の方角から、不意に、まったく予期できなかった形で、狂気の嵐が吹き出した……〉<sup>17)</sup> 大学まで集団狂気の犠牲となったため、辞職し、この山地にこもるようになった。果樹園を購入し、その収益でホテル暮しをしている。

プラティマー。シェリーについて論文指導を受けるため、ダーダーを訪れたが、42年以後、大学より姿を消す。革命党の指導者であったからである。独立後、組織を解散して、研究を再開。学位を取得してから、メーラットにある女子カレッジに勤め、現在は、校長をしている。

作者はこの二人を20数年ぶりに再会させる。

次に、チトラという女性。博士課程で実存主義を研究し、親の勧めで結婚したが、相手は不能である。この女性に、大学時代から付きまとっている反逆詩人、避暑客相手の宝石商、それに、女流画家と同棲している若手事業家が配される。

さらに、ホテルと村を結ぶ形で、人生経験を積んだホテル老支配人と健康な村娘。

人物の設定は極めて図式的であり、ダーダー、老支配人、村娘を除くと、全ての人物の原型はこれまでの作品に見られるものである。また、老支配人と村娘を

除くと、ダーダーはベンガル、チトラーはパンジャブ、宝石商はスインド、若手事業家と女流画家はグジャラート、反逆詩人とプラティマーはウツタル・プラデーシュの出身であり、南インドを除く代表的な都市生活者が勢揃いしていることになる。これもまた、作者の意図に沿ったものなのである。はたして、意図通り、嫉妬に狂って傷ついた反逆詩人はこの地より逃げ出し、若手事業家は宝石商を殺害し、チトラーは自殺する。しかし、プラティマーの病み疲れた心は、この地の自然と人々に触れ、ダーダーに接することで癒されていく。

ダーダーを介して、作者は、表現を変えて冒頭のストラを語らせるのである。〈……この疾病の、唯一、根本的な治療はロマンティズムを昇華させることである……〉<sup>18)</sup> 季節の巡り、自然のサイクル、人間の意識は同一化される<sup>19)</sup>。

1919年、17歳のイラーチャンドラはベンガル語の雑誌で、カーリダーサの戯曲『マーラヴィカーとアグニミトラ』の上演の記事を読んだ。読みたくてたまらず、帰省した兄ヘームチャンドラに頼むと、早速、カルカッタから取り寄せてくれた。しかし、粗悪な紙で読氣むに出来ないでいた。叱りながらも、兄はニルナエサーガル版を取り寄せてくれた。序幕で、パーサ、サウミツラッカ、カヴィプトラのように著名な詩人の作品を上演しないで、現在のカーリダーサを選んだのかとの問い、および、それに対する座頭の返答に、すっかり感動してしまった。30年代、放浪期に、サウミツラッカの伝記執筆を考えた。これが実現したのは、40年ぶりでアルモーラーに戻った、1975年6月から8月にかけてである<sup>20)</sup>。

『詩人の恋人』は、サウミツラッカの伝記ではなく、サウミツラッカの自伝である。半世紀以上の前の感動がどうして甦ったのか、30年以上も前の考えがどうして実現されたのか、カーリダーサ、ウツジャイニーだけへの想いで、『季節の巡り』と繋がるのであろうか。これに答える、活字による資料はない。

サウミツラッカは、祖父たちのことから筆を進めながら、カーリダーサに言及する。〈……カーリダーサに対して、私の心には以度となく激しい嫉妬の嵐が巻き上がったことか。結局は、ありとあらゆる点で、彼が卓越していることを認めるようになった……だからカーリダーサが、たとえ私のライバルであろうと、私は彼を讃えつつ、生涯を語ろうと思う……〉<sup>21)</sup> ところが、これ以降、カーリダーサへの言及はない。

ウツジャイニーにおける名門である家の歴史、祖父たちの海外通商、ギリシャ人の女を連れて来て、母と呼ぶようにいわれたこと、ギリシャ人の母をめぐる家

庭紛争, グルクラでの教育, 放浪, 旅先で出会った女性, その女性の願いを叶えるため幼友達への劇団へ託すこと, 10年前に書いた習作が上演される計画であること, 秋の満月の夜に上演され, 私が託した女性が主役を成功裡に演じたことなどが, 平易で抑えられたことばで語られる。ギリシャ人の母は, 私たちを祝福し, 結婚の用意をすることで大団円となる。〈……私のよるべなき心は, 世界中で唯一の母を求めていたのであったし, 私の開花した青春はある恋人を求めて彷徨っていたのであった……〉<sup>22)</sup> こうして私は母と恋人に出会ったのである。

『季節の巡り』と『詩人の恋人』によってイラーチャンドラ・ジョーシーはロマンティズムの復権を宣言したようである。

- 1) イラーチャンドラ・ジョーシーについての研究は, Hariprasād Gosvāmī, *Ilācandra Joṣī aur unke upanyās*; Mukul Pant, *Ilācandra Joṣī ke kathā sāhitya kā satmikṣātmak adhyayan*; Mañju Śrīvāstav, *Ilācandra Joṣī ke kathā sāhitya meñ manasatv*; Rajnī Kṛṣṇ Rāo Dīkṣit, *Pañḍit Ilācandra Joṣī aur unka sāhitya* などがある。いずれも現時点では公刊されていない。
- 解説書, 受験参考書として, Balbhadra Tivārī, *Ilācandra Joṣī ke upanyās*, Dillī, 1958; Prem Bhaṭnāgar, *Ilācandra Joṣī sāhitya aur samikṣā*, Bilāspur, 1959; Rudradev Śarmā, *Sannyāsī*, Dillī, 1959; Kṛṣṇdev Jhārī, *Sannyāsī samikṣā*, Dillī, 1968; Rajendra Jain, *Pañḍit Ilācandra Joṣī ke aupanyāsik nāyak kā antardvandv*, Dillī, 1979 などが挙げられる。
- 2) 使用テクニカル: *Ṛtucakr*, Ilāhābād, Lokbhārati, 1969.
- 3) 使用テクニカル: *Kavi ki preyasī*, Dillī, Rājpal, 1976.
- 4) “Kavi ke caraṇ cihnoñ kī khoj”, *Śrī Sumitrānandan Pant smṛti citr*, Dillī 1960, pp. 132-44; “Mahādevī Varmā nikaṭ se”, *Mahādevī samsmaraṇ granth*, Dillī, 1967, pp. 92-97.
- 5) “Mere upanyāsoñ kā lekhak vidrohī hai”, *Kādambinī* (Mar., 1974), pp. 68-74; “Himālay kī chāyā meñ bitā bacpan”, *Dharm Yug* (Jan. 4, 1976), pp. 22-25; “Ve jo mere man ko āchann kiye rahe”, *Dharm yug* (Jan. 9, 18, 1977), p. 19, 18; “Abhī maiñ ghar nahīñ lauṭā hūñ”, *Sārikā* (Jan. 16, 1979), pp. 48-50, 57.
- 6) Nikhil Joṣī, “Mere bābūji”, *Dharm Yug* (Dec. 17, 1978), pp. 25-27.
- 7) Sumitrānandan Pant, *Sāth varṣ ek rekhāñkan*, Dillī, 1960, pp. 17-19.
- 8) “Kavi ke caraṇ cihnoñ kī khoj”, *Śrī Sumitrānandan Pant smṛti citr*, Dillī, 1960, pp. 135-36.
- 9) 同掲書:140.
- 10) 新聞, 雑誌名を列挙すると, 『スダー』(*Sudhā*), 『月』(*Camd*), 『世界の声』(*Viśvavāñi*), 『世界の友』(*Viśvamitra*), 『ヒンディー文学会紀要』(*Sammelan Patrikā*), 『インド』(*Bhārat*), 『合流』(*Saṅgam*), 『ダルム・ユグ』(*Dharm Yug*), 『文学者』(*Sāhityakār*), などである。

『合流』は、1942年、アラールハーバードより刊行された週刊誌で、ジョーシーは47年より編集している。この雑誌は、40年代の後半に、かつての『サラスワティー』(Sarasvatī)が果たした役割を担ったと評価されている。また、『ダルム・ユグ』は、ヒンディー語圏でもっともポピュラーな週刊誌であるが、ジョーシーは初代の編集者として招かれている。いずれの雑誌、新聞もそれぞれの時期に重要な貢献をしているが、『合流』と『ダルム・ユグ』の二誌は特筆に値する。

『合流』編集部出身のアラスティーの一文は編集者ジョーシーの姿をよく描いているし(Ramānath Avasthī, “Maim̐ is garimāyukt svābhīmān ke āge samarpit thā”, *Sarikā* (Jan. 16, 1979), pp. 51-54), 『ダルム・ユグ』の現編集長ダルムヴィール・バラティー(Dharmvir Bhārārī, 1926-)は、『合流』編集部でジョーシーの指導を受けたことを付記する。

- 11) 小説を刊行年に従って列挙すると以下の通りである。

『憎悪』(*Ghṛṇamayī*, 1929), 後に、『ラツジャーという女』(*Lajjā*)と改題; 『遊行者』(*Sannyāsī*, 1941); 『帷の中の女王』(*Parde kī rānī*, 1942); 『幽霊と影』(*Pret aur chāyā*, 1944); 『疎外されたもの』(*Nirvāsīt*, 1946); 『解放への道』(*Muktīpath*, 1950); 『ジプシーの女』(*Jipsī*, 1952), 後に、『自己放棄のあとで』(*Tyag kā bhog*)と改題; 『朝の過失』(*Subah ke bhūle*, 1952); 『船の鳥』(*Jahāz ka pañcī*, 1954); 『亡霊の未来』(*Bhūt kā bhaviṣya*, 1973)。

- 12) Devrāj Upādhyāy, *Hindī kathā sahitā aur manovigyān*, 2nd ed., Ilāhābād, 1963, p. 234.  
 13) Dhīrendra Varmā ed. “Ilācandra Jośī”, *Hindī sahitā koś*, Vol. 2, Vārāṇasī, 1964, p. 40.  
 14) “Mere upanyāsoṃ kā lekhak vidrohī hai”, *Kādambinī* (Mar., 1974), p. 74.  
 15) “Merī racnā-prakriyā: Ṛtucakr”, *Dharm Yug* (Jan. 25, 1970), p. 22.  
 16) Prastāvit sūtr, *Ṛtucakr*, pp. 7-8.  
 17) 同掲書: 514.  
 18) 同掲書: 153.  
 19) 同掲書: 402.  
 20) Bālya-saṃsmaṛaṇ, *Kavi kī preyasī*, pp. 7-13.  
 21) *Kavi kī preyasī*, p. 2.  
 22) 同掲書: 103.

(東京外国語大学教授)